
ほのぼの妖魔ライフ

玄武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほのぼの妖魔ライフ

【Nコード】

N2198BA

【作者名】

玄武

【あらすじ】

ここは、魔力や妖力の存在する世界。その魔力や妖力をもって生まれてきた者は、普通の学園ではなくその専門の学園に通う。

そしてこの世界には、様々な島国がある。その中で一番大きい国が総合国。主に力をもたない普通の人々が暮らし、普通の学園がある。その他の国で有名なのが、火の国、水の国、植物の国、虫の国、万能の国、機械の国、死の国、地の国・通称地国^{じこく}、歌の国があり、これらの国に住む者は、何らかのエリートである。普通の人も体にもっていているが、それよりも多い、体の四分の一から半分以上を

もっている者は、エリートでなくても、これらの国に住むことが許可される。

国王、もしくは社長達の上に立つ、力の強い物を元帥、元帥よりも賢い者を大元帥と呼び、このような者は本名を隠し、仮の名を名乗り、本当に信頼している者などのみに、本名を明かすようになっている。

それでは、ほのぼの妖魔ライフ、スタートです。

第1話　妖魔法学園へ

ここは、水の国王宮。その王室でふかふかのやわらかいベッドで気持ちよさそうに眠る、それはそれはイケメンの、澄んだ碧い瞳あおの男の子　中等部くらいの　がおりました。

「って、なに勝手にナレーションしてんですか。ま、正しいですけど。」

「いいだろ、カルガー。べつに間違ってないんだからさー。」
イケメンの男の子につつこんだのが、この男の子の召使い、カルガーである。美人でスタイルもよくて気の利く、召使いたちの憧れの的である。ちなみに、長い栗色の髪をポニーテールにし、水色の高級なりボンで結んでいる。

そんなカルガーの雇い主の男の子、名前を水龍と言う。先ほど言っていたとおり、イケメンなのだが、俺様キャラでメンタルが弱い。だが、負けず嫌いのわがままな子である。

「それよりも、もうすぐ入園式始まりますよ。」

「え？いそがねーと！」

水龍の通う学園は、妖魔法学園と言う。その入園式には、全ての生徒が出席しなければならない。その開始時刻が、8時ぴったりののだ。最近中等部1年になった水龍も、例外ではない。

ばたばたとあわただしくリムジンに乗り込むこの水の国の国王、水龍を見て、カルガーは溜息ためいきをひとつついてから、リムジンを出発させた。

リムジンのタイヤが横になり、そこから空気が噴出され、キュイイイイイインと派手な音をたてて、国王を乗せたリムジンは、水の国を飛び立った。

リムジンが妖魔法学園に降り立つと、7時50分と、ギリギリだった。

「ちゃんと、体育館に行くんですよ。ざっとこの学園についておさ

「らしいですか？」

「まあ、やつとこう。」

「この学園は、幼等部、小等部、中等部、高等部、大学部があつて、それぞれがべつの棟になっています。ここまでついてこられましたか？」

「う…まあ。…頭が痛くなつてきた。」

「まあ、続けましょう。さらに幼等部長室、小等部長室、中等部長室、高等部長室、大学部長室、学園長室があります。これらは、部長棟と言つ同じ棟にあります。さらに、主に体育などをする、体育棟、その他の放送室などがある、雑棟ざつとうなどがあります。これらは、校庭をコの字を反対にしたような形で囲んでいます。」

「そついや、コの字なら棒が1本足りないな。」

「最後まで話を聞いてくださいよ。そしてその足りない1本のところには、今言つた棟と校庭と同じ、もしくはそれよりも大きい、迷いの森があります。その中心部には、天国まで届くほどの巨木があり、その頂上あたりの太い枝に、ツリーハウスがあつて、そこには長老さん…あなたと同じ中等部1年のですけど、住んでいる。と言つつわさです。」

「うわさかよっ！」

「早くしないと遅れますよ。」

水龍が気がつくともう時間は7時58分になっている。

「うつわ！やつべえ！いそがねえと！」

リムジンから、仮面をつけた水龍が出てきた。その声は、仮面をしているにもかかわらず、よくとおっている。

こうして、妖魔法学園の入園式は始まつた。

第2話　入園式と出会い

妖魔法学園、体育棟体育館では、幼等部となる生徒の入園式が行われていた。

水龍は、中等部1年として、全生徒出席のこの場に来ていた。だが、そのイケメンの顔を隠し、仮面をしている。

「ああ、顔が暑い、仮面外してえ」などと本人は思いながらじっと質のいい椅子に座っていた。

ここ妖魔法学園は、総合国にはあまりない魔力、妖力を持つ者が通う専門の学園である。なので、普通の学園よりも全体的にランクが上なのである。

だがなぜ水龍が仮面をして顔を隠しているのかというと、国王である水龍は、普通の生徒として通っているので、名前と顔ではれる可能性があるからなのである。名前は、滝波という名前を使っている。召使のカルガーは、ただのお金持ちということにしている。

「ん？まて？ここは総合国の学園だ。つまり、あまり水の国の国王の顔を覚えているような奴はいないだろう。いた。一人だけ。情報屋なら知ってるはずだ。まあ、情報屋に言っとけばいいか。」など、考えて、急に、仮面を外した。

水龍：学園では滝波と呼ぶことにしよう。滝波の近くに座っていた生徒しか、そのことには気付かなかったが、さっき言っていた情報屋は、滝波との距離がすごくあったにも関わらず、滝波の近くに座っていた生徒の驚きの呟きを聞き取り、情報を書き留めている手帳に書き加えていた。

そして、学園長の話になったとき、今日入学してくる生徒以外の全ての生徒が戸惑った。

「え、みつなさん、今年からは、私が学園長を務めることになりまゝした。これからよろしく、お願いしまゝす。」

やけにハイテンションなこの新学園長は、皆が戸惑った原因の1つ

なのだがその格好が、真っ白い髪を一部分猫の耳のように立てて、色の白い肌にカボチャの様にオレンジ色をしたバルーンスカートの長袖のワンピースを着て、その袖のすそには、緑色のレースがついていて、さらに靴までオレンジ色の、カボチャコーディネートだったのだ。

皆がこの人が本当に学園長だと認識したところで、入園式は終了した。

滝波は、カルガーの待つ門へ校庭をつきつて歩いていると、リリルと言う、きれいな花を咲かせる木の下で、なにやら相談している様子の三つ子を見つけた。だが、声をかけようと思っても、普通の人ならばあきらめてしまうほどの格好をしていた。1番上らしき女の子は、頭の先から足の先までピンクのロリータファッションで、2番目らしき男の子は、同じく頭の先から足の先まで赤い格好で、黒に白の髑髏模様の入ったスカーフをして、3番目の末っ子らしき女の子は、1番上の姉の格好より、気付いたらすごいくらいに少し色の違う格好だった。3人とも、三つ子だからそっくりな顔をしているけれど雑誌のモデルになれそうなほどに整った顔だった。姉と末っ子のほうは、目がぱっちりしていて、2番目らしき男の子は、少しそれより細いぐらいだ。

「あれ、だれかいるっぱ。おこりっぱ、だれだっぱ？あいつ。」

「おれに聞くなよ桃姫。」

「おこりっぱお兄ちゃん、桃姫お姉ちゃん、それよりもイケメンっぱよ。それにお金持ちそうっぱ。」

「ももっぱ、イケメンだけとお金持ちそうには見えないっぱよ。」

「たしかに。桃姫の言うとおり、お金持ちそうにはぜんぜん見えないな。」

「おいお前ら、お金持ちじゃないとは失礼だなあ。」

「「「え！」」」

3人が声をそろえて言った。

「お金持ちっぱか？」

「お金持ちに決まってるだろ！」

と、そのとき校庭の滝波がいる、リリルの木の下にリムジンが飛んできた。

「おおー、すごいっぱね。」

「そーだなー。」

「すごいっぱね。」

リムジンのドアが開き、カルガーが運転席から降りてきた。

「迎えに来ましたよ。滝波さん。」

「おう。」

「ちよつと待つてっぱ」

「実は、家出してきた住むところが無くなってしまったんだっぱ。」

「一緒に住んでもいいっぱ？」

「頼む。」

「んゝまあ、いいぞ。な、カルガー？」

「いいですよ。でも変わったしゃべり方ですね。」

「くちぐせなんだっぱ。」

「おれは普通だぞ？」

「じゃあ、これからよろしくお願いしますね。ところで、お名前は？」

「上から、桃姫。」

「おこりっぱ。」

「ももっぱだっぱ。」

「お前ら、早くかえるぞ。」

そして5人を乗せたリムジンは、水の国王宮へと、飛び立ったのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2198ba/>

ほのぼの妖魔ライフ

2012年1月5日19時51分発行